

三、ムラと土地

川 本 彰

(一) 私のムラ領域論は私の経験から把握したもので、決して理論

的究明からのものではないことを強調しておきたい。何処こんなことをいうかといえ、抽象的理論の泥沼に入ることさえきたいからである。例えば共同体という概念がさきに存在し、その概念でムラを割りきることとはなるべくしたくないからである。

私がムラ領域の重要性に気づいたのは、昭和三二年夏から三年間、柿崎京一氏と交替して参与観察をしてきた岡山県新他ムラにおいてである。故に、その時点における現実としてのムラの実態をまず報告し、その現実からムラ領域論が成立するかどうかをととのがまず第一の問題であろう。

□ つぎに問題としたいのは、その現実のムラは、昭和三〇年台のムラであるが、そのムラも歴史的格をおびたものということである。明治以降の近代化政策の一貫として、明治以前の徳川期ムラが多くの外庄、内部変貌をへて、昭和期の戦後におけるムラに辿りついているということを確認しておきたい。それは同じく戦後になって封建的・反動的と焼印をおされ、解体された天皇制家族国家体制の基本的単位たる明治的イエと同じ運命をもつものであった。

□ しかし、日本のイエには日本のイエたる本質があると思う。その一つが血縁の擬制性、それに母性原理であると私は考えている。ムラにも歴史の変容の奥底に沈潜しているムラの日本の本質があるのではないか。その一つには日本の稲作条件、ないしは日本人の土地に対する特別な関係があるのではないだろうか。これを、問題提起として考えてみたい。

四 これもまた問題提起の域を出ないか、ムラの類型を大ざっぱにおさえておきたい。人間と土地との関係といっても、日本中どこでもおなじ自然的・社会的環境ではないので、人間と土地との関係に地域性が二次的ではあろうか成立するのはとうぜんと思われる。

〔五〕 さて、こういう日本のムラは、大社会における産業化と大都市化によって、まさに解体寸前の運命にある。ある意味では、日本のイエもムラも何故にかつては、あれほど強固であったのが、今日何故にこんなにもろいのかと思われるほどであるが、そのもろさの基本的原因は、イエとムラはともに日本近代の政治的産物であったということであろう。しかし、このままイエとムラをなすがままにその崩壊をとうぜんであると対岸の火災視しておいてよいか。一方では、今日の政治、行政がムラに思い入れをしている状況下においてである。

私は今日の農業崩壊、社会の不安定、自然破壊の現況下において、日本のムラの本質、ならびにその機能の有効性、ないし無効性を考えてみる必要があると考えている。

〔六〕 最後に弁解になるが、久しくムラ研究を怠けてきた私にとって、過去の私の考えを一步もでていないこと、更にこの報告が現在私の考えている構想のスケルトンにすぎないことをお許し頂きたい。また、このレジュメ提出までに私の報告原案が固まらないため、当日の報告で大きく要旨が異ってしまうことがあるかもしれない。御寛容を乞う次第である。